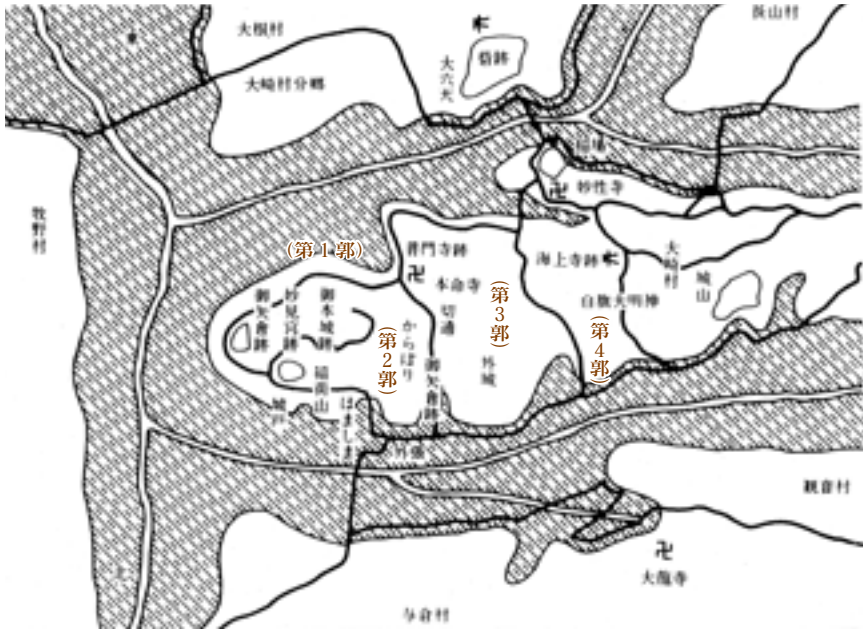


「香取の中世遺跡」

大崎城跡



▲絵図解説 () は筆者による

大崎城は国分氏の居城と伝えられ、古くは「矢作城」と呼ばれていました。城跡は香取川の中流域、南から北に伸びる台地にあり、南北約800m、東西約300mという香取地域では大規模な部類の城郭です。大崎城跡は、昭和45年に市の史跡に指定されています。

築城から廃城

国分氏は千葉介平常胤の第5子胤通にはじまり、戦国期には香取郡内で最も有力な在地領主になっていました。胤通が本矢作城を築き居城とし、国分氏第5代泰胤が、鎌倉時代末期に大崎城に本拠を移したとされています。

大崎城は天正18年(1590)の徳川家康による関東制覇の時に、ほとんど戦うことなく開城したと伝えられています。その後、下総を領国化した徳川家康の家臣鳥居元忠が入城しましたが、まもなく岩ヶ崎に築城(岩ヶ崎城)を始めました。

しかし、元忠は岩ヶ崎城の完成を見ることなく、慶長5年(1600)に京都の伏見城で戦死します。遺領は元忠の第2子忠政が継ぎましたが、陸奥磐城へ国替となり、それ以降大崎城は廃城になったと伝えられています。

大崎城跡では、過去4回いた絵図が残されています。弘化3年(1846)の「白田七郎右衛門記・矢作古城跡之図」です。絵図には「御本城跡」「妙見宮跡」「城戸」「はましま」などと共に、「白旗大明神」「妙性寺」「本命寺」などの書込みが多数みられます。「御本城跡」は主郭を、「城戸」は城への入り口を指すと思われます。

4回の発掘調査

大崎城跡では、過去4回

の発掘調査を実施しています。第1郭の主郭部、主郭部西側の裾部と中段部、第3郭の中段部で行いました。主郭部の調査では、「虎口」と思われる主郭部への入り口跡を調査しました。主郭部西側の裾部は絵図に「はましま」「城戸」と記されている所です。大きな砂岩を使い護岸工事を施した濠跡や、盛土をして作り出した平坦部を調査しました。

平坦部は少なくとも3回以上の整地をしていることがわかり、各整地面からは建物跡や井戸跡がみつかりました。遺物は漆器類や中国産の陶磁器類、僧侶の名前と思われる墨書「遍光」のある土器、呪符木

簡「急急如律令」、桜の木を削って作った「永禄4年(1561)銘の卒塔婆などが出土しました。ちなみに永禄4年は、織田信長が桶狭間の戦いで、今川義元を破った1年後の年です。

第1郭と第3郭の中段部からも3回以上の整地の跡を確認しました。やはり建物の柱跡が多数みつかりました。また第3郭では、堀跡から3本の丸太を束ねた柱跡を調査しました。堀に橋が架けられていたと考えられます。

発掘調査は、大崎城跡全体からすれば僅かな範囲ですが、文献や絵図には記されなかった城跡の様子を、明らかにしつつあります。